

孔子の「天命観」について*

舒 大 剛
高 橋 庸 一 郎 (訳)

「天命観」は「天道観」とも言われるが、これは自然界と人間との関係についての見方を言うのである。孔子の天命観問題については、これまで議論の多い、そして諸説紛紛たる重要な問題である。五・四運動の時代の、「孔家店を打倒せよ」というスローガン以来、孔子の中国の政治的活動上での神聖な地位の動揺にしたがって、孔子の学説も一挙に下落し、かつては一文の値打もないかの如くに言われたことさえある。かつて一つの比較的流行した観があったが、それは孔子の時代（なにも孔子に特定しなくてもよいが）には人々は天道（自然とその規律）を認識することは不可能であったから、もし孔子の思想の中にある種の天命の意識があるとすれば、それは神秘主義的なものであり、唯心主義の範疇に属するものである、とするものである。我々は孔子の学説の政治的地位を否定することによって、その学術的地位をけなし、低めるということは、学術史上非常に有害な偏見であり、たとえ孔子の学説が現代中国の現実を指導する上でどんなに多くの気に入らない不完全な点があったとしても、我々は彼が中国史上かつて到達した学術的な高いレベルを否定することは出来ないし、更に彼がかつて歴史の上に与えた深い影響を否定することは出来ないと考えるのである。事実を探求するという精神に基づいて、我々は孔子の言論と行動を全面的に分析する所から手を入れ、孔子の天命観をまとめて解きあかし、そこから比較的公正な結論を

導き出す必要があると考えるのである。以下孔子は天道を知っていたかどうか、孔子はどのような状況下で天を語り命を語ったか、また孔子の天命観の思想的軌跡は如何なるものであったか、そして孔子の天命観の歴史的地位はどうであったか、などの四つの方面からこの問題を検討していくつもりである。

— 「子罕^{まれ}に言う……」について

孔子は天命を認識していたかどうか、つまり天道を知っていたかどうかは、これは本来問題にはなり得ない問題であるかもしれない。なぜなら孔子はかつて自分から、「五十にして天命を知る」と言っているからである。しかし孔子の門弟達はすでに当時この事実^まに疑いを抱きはじめていたようである。『論語・子罕』の第一句は、「子罕^{まれ}に利と命と仁を言う」であり、孔子門下の「十哲」の一人子貢は、「夫子の文章は、得可くして聞くなり、夫子の言性と天道は得可からずして聞くなり」（『論語・公冶長』）と言っている。孔子は天道（或いは天命）というこの自然を社会規律及び人間に関する問題には関心がなく、ただ具体的な礼楽規範や冗長な文章や繁瑣な文節などの枝葉末節なものを重視していたかのようなのである。この為にヘーゲルも、「孔子はただの現実的な世間的智者にすぎない。彼には思辨的哲学が全くない。ただいささか善良で、老練で、道徳的な教訓があるだけである。

* 著者の舒大剛氏は現在四川連合大学古籍整理研究所副所長、史学博士である。この論文は南京の東南大学東方文化研究所が編輯している雑誌『東方文化』第三号（1994年4月）に掲載されたもので、著者自身の承諾を得て訳出したものである。表示感謝。

我々はそこらいかなる特別にすぐれたものをも獲得することは出来ない」と述べている。なる程、孔子は一人の世間的な智恵者であり、彼の注意力は乱世を救済するという必要性にこたえるべく、人倫と政治の方面に集中され、宇宙の本質や自然の規律及び論理についての言説は非常に少なく、更に具体的な論証も無い為に、今日まで伝えられて来た孔子のすべての言行の中に、こうした方面の問題についての直接的な或いは完全な回答をさがし出すことは非常に困難であるという状況になっている。しかし一人の世間的智恵者として、孔子はその自由で奔放な智恵と、学を好んで倦むことのない精神と、また深思熟慮という方法によって、彼は広い学習と積極的な実践と分析帰納の後に、それによって具体的知識とは相い反する普遍性に対して、また天、地、人間の規律性（即ち道）に対して、体験する所があり、認識する所があったのであろうということは想像に難くない。事実孔子本人は学習を二つの段階に分けている。即ち「下学」と「上達」である。「上・下」は『周易・系辞』の「形而上の者は之を道と謂い、形而下の者は之を器と謂う」の「道器」であり、つまり普遍的規律と具体的事物を指すのである。「下学」とは人事を主とする具体的知識を学習することであり、これは「博学（学を博くす）」の段階である。「上達」は即ち道を聞くことであり、天道を主とする具体的にして普遍的規律を積極的に知る段階である。孔子が自ら言っているのは、「下学して上達する」（『論語・憲問』）であり、「五十にして天命を知る」（『論語・為政』）である。且つまた「上達（即ち道を聞くこと）」を推賞し、「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」（『論語・里仁』）と言い、更に一步すすめて、「上達」を君子であるか、小人であるかを計るものさしとしているのである。故に、「君子は上達し、小人は下達す」（『論語・憲問』）といい、「命を知らざれば以て君子と為す無し」（『論語・堯日』）といい、「君子に三畏有り、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る、小人は天命を知らずして畏れ

ざるなり、大人に^な狎れあり、聖人の言を^{あな}侮どる」（『論語・季氏』）と言うのである。ここから解することは、彼は、「天命を知る」、或いは、「道を聞く」ということに対して多くの注意を払い、多大な情熱をそそぎこみ、ついには、その代償に命^{いのち}をかけてもおしくないと考えているのである。即ちこれは当然、彼は規律の探索と聞知（聞いて知ること）については重視していないのであるとは、決して言えないということである。

『論語・子罕』のいわゆる「罕言」や、『堯日』の「不聞」については、孔子の人材の用い方、また彼等に対する教育のし方という点からこれを解明すべきであろう。孔子は「上智と下智は移らず」（『論語・陽貨』）としてたから、「中人以上は以て上（道或いは天命）を語る可し、中人以下は以て上を語る可からず」（『論語・雍也』）というのである。孔子の門弟は三千人で、彼等の中の智や愚はそのレベルがそろっていた訳ではない。その中には命を聞くにあずかり得ないもの、或いは天道にあずかるまでに到っていない者も当然少なくはなかつたのである。

今日まで実際に伝えられて来た孔子の言論の中では、仁を言い、性を言い、また利を言うばかりでなく、天を語り命を語ることもまた少なくはないのである。

二 天命の機微——孔子はどのような状況下で天命を語ったか

「天道」は孔子の言語辞典の中では、「天」、「道」或いは「天命」、「命」とも称されている。「天」、「道」は「天道」の簡称か或いは異名である。「天命」は「天道」から分れたものであるが、しかしそれぞれに異なったものである。『大戴礼記・本命』に、「道より分かれたるもの之を命と謂い、一より形づけられたるもの之を性と謂う」とあり、また『礼記・中庸』には、「天命之を性と謂い、率性之を道と謂う」とある。即ち「命」といい、或いは「天命」というのは、道（或いは天道）から分化して来て、人

間に作用するその部分的内容を言うのである。また「性」とは天道の統帥と支配を受けて形成された具体的な個性を言うのである。天命とは即ち天道の人文化されたものであり、人文化された天道はこれを「天命」（或いは「命」と言うのである。

『論語』の中で、孔子が天道や天命に対して解釈を加えているということは非常に少ないか、或いは全くないと言ってもいいぐらいである。しかしその天道や天命の範囲もまた明確ではないのであるが、孔子がこれ等の概念を使用する具体的な場面から、我々がその基本的な特色と内容の指し示すものを帰納することは難しいことではない。

一番目は逆境にあって、自から決意をかため自から慰さめるという場面である。それは孔子が大司寇として魯国の摂相となった時に、孔子は子路を推薦して季孫氏の家宰とし、三都を墮し、公室を尊び、事業はさかんになって大いに希望があった。ところが公伯寮が季孫氏に子路を誣告し、季氏と孔子との間の信頼と親密な関係を打ちこわそうと企んだのであった。この事は孔子の新しい政策に関して季氏の支持が得られるかどうか、即ち孔子の事業が順調にすすめられたかどうかという問題であった。故に子服景伯からこの不幸なニュースが孔子にもたらされた時、孔子は、「道の将に行われんとするかは命なり。道の将に廃されんとするかは命なり、公伯寮其の命を如何せん」（『論語・憲問』）と言ったのである。

孔子は放浪の途中、非常に危険な目にあっている。衛より陳に向って、途中匡国を通ったのであるが、匡人に陽虎と間違えられて包囲され、五昼夜身を脱することが出来ず、生死の境に追い込まれたことがあった。その時孔子は次のように言っている。「文王既に没し、文茲に在らざるか、天の將に斯文を喪ほさんとするなり、後に死する者は斯文に与かるを得ざるなり、天の未だ斯文を喪ほさざるや、匡人其れ余を如何せん」（『論語・子罕』）

続いて宋に来て、大樹の下で礼を習っていた

時、跋扈する宋国の権力ある臣桓魋が衆をひきいてやって来てその大樹を引き倒し、そのうえ大声でどなり散して孔子に害を加えんとしたために、弟子達はそこから速やかに立ち去ることを孔子に進言したが、その時孔子は、「天徳を予に生らしむ、桓魋其れ予を如何せん」と言っているのである。

二番目は、人に誤解され、天を仰いで誓いを発する時である。孔子は衛国に寄居し、やむを得ず有力者の靈公夫人南子に謁見することになった時、子路はいぶかり、孔子は誓を發して、「予の否ぶる所の者は、天を厭う、天を厭う」（『論語・雍也』）と言っている。これと同じ観念を表したものは外に二例ある。衛国の臣王孫賈が孔子に、「其の媚（親しみ願うこと）を奥（室内西南の角の三神のこと）に与うより寧しろ灶に媚するとは何の謂ぞや」と質問したのに対し、孔子は答えて、「罪を天に獲る、禱る所無きなり」（『論語・八佾』）といい、また孔子が病に倒れ、子路が門人達を臣にしたててそばに侍らせた時、孔子は、「臣無くして臣有りとす、吾誰を欺むかん、天を欺むかんか」（『論語・子罕』）と言っているのである。

三番目は孔子が困惑した場面で、天に詰問する時である。

現実の生活の中で、多くの理に合わない事や理解できないことに出くわすことがある。そんな時孔子は結局浩然たる天を仰いで嘆息し、天に詰問するのである。彼の愛弟子の冉耕（伯牛）が悪質の病にかかり、孔子は彼をたずねて、「牖より其の手を執りて曰く、之を亡はずは命か、斯の人にして斯の病有らしむ、斯の人にして斯の病有らしむ」（『論語・雍也』）と言っているのである。孔子はかつて、「仁者は寿なり」と言ったことがある。ところが、「三月仁に達えず」であつたうえに、孔子が心から愛した高弟の顔回は年若くして（40才）で逝世し、孔子は号泣慟哭し、「噫、天子を喪ほせり、天子を喪ほせり」（『論語・先進』）となげいている。顔回は一生孔子につきしたがい營々として道を修めたが、しかし身は困窮の中に終り、その室

は赤貧洗うが如しであった。しかし子貢はよく途中で学をやめ、文を棄てて商を行い、正道に従わずしてその家は大金持であった。「徳は身を潤し、富は屋を潤す」とか或いは、「周に火賚有れど、善人は是れ富む」といった古くからのおしえは、ことごとく現金に換金されることなく、彼を助けることも出来なかった。孔子はそれに感じて、「回や其れ庶し（道に近づいたということ）、屢ば空なり、賜（子貢）は命を受けずして貨殖なり、億則ち屢ば中る」（『論語・先進』）と言っている。

四番目は天をもって則となし、天を以て法となすという場合である。孔子は天の行には度があり、人は天行に效い法るべきであるとし、上古の帝堯は天に法った典型であるとしたのである。故に、「大いなる哉堯の君たるや、巍巍として唯だ天を大なりとし、唯だ堯えに則る」（『論語・泰伯』）と述べている。更に孔子は堯が舜に命じた話をあげ、「咨爾舜よ、天の歴数は爾の躬に在り、允しきは厥の中を執る、四海困窮するも、天禄永終たり」（『論語・堯日』）といい、法は則ち天行で、帝王に限らず、心有る者は之を為すというのである。人は皆な堯舜たるものが可能である。孔子は曾て子貢に言ったことがある。「予れ言無からんと欲す」と、子貢はそれに対し、「子如し言わざれば、則ち小子何をか述べん」と言い、これに孔子は、「天何をか言わんや、四時行し、百物生ず、天何をか言わんや」（『論語・陽貨』）と答えている。そして更に人が一旦天道を認識したら、利鈍窮通に明らかになり、彼は怨みなく、恨みなく、憂いもなく、惧れもない、一人の自由自在の人間となるというのである。「天を怨まず、人を尤まず、下学して上達す、我を知るはそれ天か」（『論語・憲問』）となるのである。人もし天を知らば、天亦た人を知り、天人交往すれば、人天徳を合すのである。これが大体孔子が認識した最高の境地であり、即ち『礼記・中庸』のいわゆる「天地の化育を賛ぎ」、「天地に参与す」という境地である。

三 孔子の天命観思想の軌迹

上に述べた事からわかる第一の情況は、天道（或いは天命）を力の源泉とし、成功へのうしろだてとすることである。天道（或いは天命）はあがらうことが出来ず、すべてが向う最終的な、そして必然的な決定力を備えているということである。第二の情況は天道（或いは天命）を正義と善良の化身とみなし、正義と善良の標準たらしめ、そしてそれ等の権威ある最後の仲裁力とみなすことである。第三の情況は、天道（或いは天命）の必然性、或いは可能性について、たとえその可能性が実現に到らなくとも、或いは全く反対の方向に発展した時でさえ、その天道（或いは天命）に対して提出される一種の質問と概嘆である。第四の情況は、天道（或いは天命）に対して物質的、或いは規律的（或いはそのそなえている所の自然の特徴と必然的趨勢）認識を得た時である。即ち孟子のいわゆる、「之を為す莫くして為す者は天なり、之に至る莫くして至る者は命なり」（『孟子・万章上』）である。これは孔子の最も基本的で最も本質的な天道（或いは天命）観念であり、前の三種の情況に於ける種々の議論、感慨、質問は、すべてこの第四種の認識を基調として出発するものであり、もしこの一つの観念を前の三種の情況の一つ一つの論述の中に組み込めば、すべて符合して、通じないものはないのである。

我々は孔子が天命観を確立していった過程をだいたい描き出すことが出来る。孔子は博く学ぶこと、体験、深い思慮を帰納を通じて、天道の具えている物質性（「天何をか言わんや」）、規律性（「四時行す」）或いは必然的趨勢（「百物生ず」）を認識し、また更に天道が人という天の申し子に対して決定的で強制的な作用をもっているということを体得したのであり、これが即ち、「道より分れた」天命なのである。天命を感知するにともなって、孔子は鋭敏に、天地造化の精霊としての人間が天道を理解し、法に效った造物者（天）を理解し、その結果と

して天道（「天地の化育を賛す」）を助ける責任があり、これがすなわち天に法り行を制すことであり、天に替って道を行うという使命であるということ認識するに至ったのである。彼は君子というものはよく天道を理解し、天命を認識し、天道によって自己を完成させ、更に道を行って、それで使命を完成させなければならないと考えたのである。これが即ち彼の、「天命を畏れ」、「命を知らざれば以て君子たる無し」という命意の存在する所以なのである。孔子本人は、「五十にして天命を知」った後、使命に対する鋭敏な感性から、今度は、「隠居して以て其の志を求め、義を行い以て其の道に達る」という淡泊な生涯に安んずることなく、積極的に世に出て、波汲として救世につとめ、周囲の誹謗中傷にもめげず、中都の微たる宰の職を棄てず、鋭意勉勵努力し、嘗嘗として治を求め、ついに大司寇兼攝相の位につき、一つの赫々たる業績を作り出したのである。魯国での失意の後、彼は惜しむことなく家を捨て、家族を捨て、市井に背をむけ、郷閭を離れ、転々数千里、十四年間の歷程の間に七十余君と相いまみゆるも遇されることなく……ここに至ったのである。是れ天命の驅使に非ざる無く、自己のよって立つ所と用武の地を得んことを求めんと欲し、以て天に替って道を行い、以てただ「其の義を行」うのみであった。

天道（或いは天命）の客観的な必然的趨勢に対する認識と体験から、孔子は自己に定められた使命（即ち「克己復礼」を通じて、人性（仁）を有らしめ、秩序（義）と調和の社会を有らしめることを実現すること）の確証性と実現可能性に対して、シカと信じて疑わなかったのである。彼の見方からすれば、使命が天命の賦予するものであるかぎり、天命も道から分かれ人間に作用する所の必然的な力であり、故に彼の使命も客観的な必然性と現実的な実行可能性をそなえているのである。これによっていずれにしても彼は乱中に治を求めるといふ過程の中で多大な障碍と、多大な攻撃と、多くの厳しい危険に遭遇したが、彼はすべて自分が天に替って道

を行う使命を荷なった者であり、必ずや凶にあえばそれを吉に変え、危を転じて安となし、自分の使命は必ず実現するものと信じたのである。（或いは彼の在世中に、或いは弟子と後進の世代に托して）列国を周遊していた時、しばしば匡に畏れ、宋に圧迫され、陳・蔡に困じてはいたが、彼はいつも信念ゆるぎなく、全く動揺せず、一粒の食糧さえ口にする事なく、飢に苦しんでいる時であっても、学を講じ道を論じてやむことなく、彼の愛した弦歌をかなでる音は絶えることはなかったのである。彼は道を聞くことを以て至高の事とし、道を行うことを以て帰結とし、道の実現を追求することを以て楽しみとし、「發憤して食を忘れ、楽しみて憂を忘れ、老いの將に至らんとするを知らず」であり、これは身を以て道に殉じ、身を捨てて義を取るといふ崇高な自我献身の精神を表現しているのである。

天道（或いは天命）というこの自然の規律の必然的趨勢に対する認識から、孔子は天道が公正無私であり、一切の真善美の力の源泉であるということ認識し、そこから更にそれを人間の善悪の尺度であり、是非の最終的決定者であるとみなしたのである。天道の公正無私という基礎の上に建てられたもう一つの結果として、彼自身が天命である使命を体現することもまた正しく、無繆であると考え、よって彼の主張がことごとく壁につきあたって後でさえ、彼は自分の主張が正しいか否か或いは現実に適合しているかどうかを自己反省することなく、世の人々の、「我を知る莫し」をむしろ怪としてこれを責め、ついには上天は我を天に替って道を行わしめ、乱中に治を求めしめているのであり、これこそ天の配劑なのであると考えたのである。そこで、「天を怨みず、人を憐えず」、「天を楽しみて命を知る故に憐えず」の境地に達したのである。しかし当時の現実には彼の想像と主張に反した事が多く、彼の考えた天命に合わない事も多かった。そこで彼はこうした状況に対して困惑を感じざるを得ず、また天命が行われべきでありながらいまだ行われていないとい

うことに幾多の感慨と深いため息を發せざるを得なかったのである。

これは孔子が天道というこの自然の規律が具有している物質性と必然性を認識しはじめてから、更に進んで天命と使命を体得し、あわせてその使命の正しさと必然的な実現の可能性を堅く信じ、みずからつとめて実行し、汲汲として求めるようになるまで、こうした実現の可能性を現実に変化することを希望したのであるが、しかし結局は理想と現実の厳しい矛盾の下で、「我を知ること莫きなり」という言葉を以て、彼の思想の軌迹と行動の論理は終りを告げたのである。

四 孔子の天命観の歴史的地位

孔子の天道観（或いは天命観）は二つの大きなはっきりとした特徴を持っている。即ちそれは歴史的継承性と歴史的創造性の統一であり、天道の客観性と人間の能動性の統一である。前者の特徴は中国思想界を蒙昧迷信の段階から理智的思考の段階に転化するのを促進達成させたことであり、その点で孔子の思想はまさしく画時代的な意義を持っていたのである。後者の特徴は、天と人との一体性を促進達成させたことであり、これは中国の天人合一思想の濫觴であり、中国文化に深く影響を与えた所の主要な観念となったのである。

現代の哲学界の比較的公認された見方によれば、人類の思想的発展は三つの段階を経ている。それは即ち迷信の段階、形而上学的段階、それと実証段階である。迷信段階それ自身は三つの時期を包括している。即ち拝物教的、或いは万物有魂と考える時期であり、また多神論の時期、そして一神論の時期である。拝物教は物質対象がすべて感覚と意志を持っていると信じるのであり、これは尚、未だ自然界から分離されていない原始人（或いは野蛮人）が、自分の形象を幻影化し、それを物質対象に移入するという人類共通の特徴を持っている。多神論は多くの神霊がいて、各々のそれぞれ異った領域を統轄し、

それぞれ異なる事柄に関与しながら人間の生活に影響を与えると信じるものである。今に伝えられている山神、河伯、風神、雷公、雨師の類及び三皇五帝と関係のある時期の各種各様の、つくられて神聖とされるものは、まさしくこうした多神論観念の落し子ともいえるものである。一神論は多くの神々の中に一つの絶対的權威を持った上帝（或いは天神）が人間の活動或いは理念の到達する一切の領を統治するものとするものである。殷人の帝（或いは上帝）、周人の天（或いは皇天上帝）は即ちこうした観念の集中的反映である。形而上学的段階では、人々はもう世界を神聖（或いは人格あるものとしての上帝）なるものの創造とは理解しないし、またその支配を受けない。それにとって替って、万物を産み出すものとして最も本原的なものを仮定し、万事万物（天地を含めて）すべてこの最も本原的なものが生み出したと考えるのである。中国に於ては、老子の、「天に先んじて地生ず」が有している「道」が、即ちこの段階の寵児と言えるであろう。実証段階は、科学的方法によって現実を論証し、併せて現実を改造する支点を揭示し、孔徳の説を用いて言えば、これは非のうち所のない段階に到達したということであり、それは形而上学的解釈を打ち破り、更に重要なことは、これは人間の絶対的にして且つ必然的な真理に到達しようとする雄大な理想と抱負である。これは科学を主とした認識段階である。もし迷信段階の思維は熱狂的であり、形而上学的段階は思辨であると言うならば、この一時期の思維は理智的或いは理性的であると言える。中国に於ては、完全な意味での科学的段階の到来は今世紀であったという事情はあるが、しかし天道の自然と規律に対する朦朧とした認識と理智的（或いは理性的）思維の運用は、とくに春秋社会に於て生れていたのである。孔子の時代より少し早い子産は、「天道は遠く、人道は邇し、相い及ばざるなり」と述べている（『左伝・昭公十八年』）。人類はすでに自覚的に自然界の中から自己を分離し、独自の自覚的な自我意識を獲得し、更に且つ人類はすでに自

然(天)と人間社会の運行と発展には規律(道)的にして循環的なものがあるということを認識しているということを表明したのである。まさしく孔子及びその時代は人間のこの自覚的意識を理智的思維に転化させ、老子の「道」という形而上学的觀念の泛濫と切りはなして、中国を理智的な思維の時期に前進させて入らしめて、ある程度形而上学的觀念の支配の苦しみをまぬがれさせたのであり、これは孔子の中国文化に対する偉大な貢献であると言わざるを得ないであろう。

孔子はどのようにしてこの歴史的継承と創造の統一を実現したのか。先づ彼は歴史上の、古くからあった名詞と表現形式を継承し、更にその名詞の内容に新しい改造を加えたのである。哲学的概念としての「天命」、「天」は孔子以前に於ては、すべて人格神上天を表わしたのであり、それは人間を超えた者の意志、力と權威の綜合体であった。『尚書、召誥』には、「惟れ厥の徳を敬わざれば、乃ち其の命を墜す」、「皇天上帝、厥の元子、茲の大国殷の命を改む」とあり、また『泰誓上』には、「民の欲する所、天必ず之に従う」とある。また康王の時代の『大盂鼎』には、「丕顛なる文王、天有の大命(命)を受け」とあり、更に『詩経・大雅・文王』には、「天命常には靡らず」とあるなどすべて上記の意味で用いられている。孔子は続いてこれ等の名詞(或いは符号)を応用して使用し、またこれ等の表現方式を応用使用したのである。(例えば「天子に徳生らしむ」、「天之を厭う」、「天子を喪はせり」など)しかしその場合にこれ等の言葉の表わす概念に新しい内容をそそぎ込んだのである。それは即ち天道という概念を用いていままでの言葉を充実させ、天命を統率させるものとしたのであり(道より分れたる之を命と謂う)、天命は道より分れて人に作用するという内容を表わすのである。天命は自然性(天)と必然性(命)を成立させる代名詞であり、『孟子、万章上』にいう所の、「之を為すこと莫くして為す者は天なり、之に至ること莫くして至る者は命なり」は孔子のこの思想の確か

なる解釈である。古い皮袋に新しい酒を入れ、古い形式に新しい内容を盛る、これは『周易』のいう、「武に神たりて殺さず」という智慧のすぐれた妙法である。匡亜明先生は、「(孔子)は古い觀念で以て(古い名詞を応用して)人々の宗教的感情を是認し、安心感を与え、新しい觀念を用いて人間の実際の行動を論証し指導し、力めて両者の并存と協調を求めたのである」と述べており、これは高い見識と言うべきである。

歴史的な継承性と創造性の実現にともなうて、孔子の天道観は天道の客観性と人間の能動性の統一を実現した。孔子は一方で天命が人事を決定するという古い表現形式を借りて、天道(或いは天命)に自然性と客観性と必然性という内容を賦予し、天道の客観的規律性は「天命」という形式を通じて人間の行動に影響を与えまた決定するものと考え、また更にこうした客観性と必然性は欺くことの出来ない、犯すことの出来ない、また違反することの出来ない、そして更に逆転させることの出来ない性質と威力を持っていると考えたのである。そこから子産のいう、「天道は遠く、人道は邇く、相い及ばざるなり」という、天道と人道を劃然と区別して、自然の規律に違反する傾向を克服したのである。孔子は天と人を密接に関連させ、天道と人道を結合させたが、しかし人間は天の奴隷ではなく、天道を認識し、天道に效い法り、天道を利用して人事を促進達成させるという、天道に賛成する主観的能動性を具有している万物の精霊なのである。天道の客観性を強調すると同時に、孔子はまた人間の能動的作用という旗を高く掲げて、「人は能く道を弘め、道が人を弘めるに非らず」(『論語・衛霊公』)し、「唯だ天は大なるのみ、唯だ堯之に則る」(『論語・泰伯』)として、あわせて自から天の「無言」(自然性)に法ればはじめてその規律にしたがって万物は生成し、事業は成就するのである。絶対の權威を持っている天命の面前で、孔子は従来宿命論者ではなく、其の成を坐して享受するのではなく、或いは座してその毙れるのを待つと

いう訳ではない。彼は積極的に新しいものを取り入れ、奮闘して休むことなく、人事を重視し、そして楽しみて優いを忘れるのである。彼は充分に、「天を楽しみ命を知る」という所の智者が積極的に有している高貴な人格を体現しているのである。

以上から解ることは、孔子は天道を重視したばかりでなく、天道をよく理解したのである。つまりそれは天道の自然性であり、規律性であり、必然性である。当時は強を以て弱を凌ぎ、衆を以て寡を暴い、上は下に慕われ下は上を僭越し、倫理は定まらず、礼は失われ、楽は崩壊するという秩序が糸の如くに乱れた社会的現実によって、人々が知りたいと要求したのは、「何故？」ではなく、「どうするか？」であった。また彼本人が社会文化の熏陶をうけたおかげで、孔子は天道とは何か、規律とは何かについて奥深い検討を行った訳ではなかったが、それによって自然を理解し、自然を研究という方面での多くの空白を残し、更に後の中国社会と中国思想に対していくらかの消極的な影響を生み出したのである。これは当然彼の力の足りなさであり、また中国文化史に於ける一つの大きな至らなさでもある。しかし孔子は確かに天地には自ずから一種の必然性と規律性（即ち天道）があるということを知覚していたし、敏感に天人の間にはある種の関係が存在するということを知覚していた。即ち天道は天命という形式で人にはたらきかけ、蒙朧とではあるが、人間社

会にもある種の必然性・規律性（即ち人道）があるということに思い到り、そして更に人は天道を認識し、天道に従い法り、天道を利用し、また天道に賛成しているとみなしていた。天と人とは一つのつながりであり、天と人とは相互に作用し合い、人の価値は適宜にしかも正確に天道、天命を察知し（「命を知らずして以て君子と為す無し」）、天命を使命とし、天に替って道を行い、身を以て道に殉ずるのである。人間は天地造化の寵児であり、また人間は天地造化の賛成者でもある。人は「道から分」れた「天命」の化身であり、人間はまた「弘道」の霊長なる存在である。もし孔子の天道観の中に、天道は権威的であり、絶対的なものであり、また正義であり、更に善なるもの美なるものの力であるとするものがあるとなれば、それなら人間はこれ等の権威性と絶対性にうちまたがって、これ等の正義と真善美の実現に向って生き生きと疾駆する霊長的存在である。天道の客観的威厳を失わず、また人間の叡知にみちた活動も失わないかぎり、こうした上天造化に対する賛美は、人間の霊長としての存在に対する讃歌よりもすぐれたものであると言いうるのであろう。これは孔子の天道観（天命観）の極めてすぐれた価値である。これこそ孔子の思想だけが持っているものなのである。

(1995年12月11日受理)